るからと言つたのだ。

しまひには女の帶をほどかせて、女の首にしばつて、一方の端を仰向けにねた僕の胴に結んで

『之ならあんたが、此の部屋の外へ出樣とすれば、直ぐに僕は目を覺ますから』と言つて、

女が片隅に肩を顚はしながら立つてゐるので、僕は其のまゝにしてゐた。

ランプを吹き消して、一時間ばかりの間、でも怪し氣な氣分に僕もなつたのか、女が羽織丈を脫いで、僕の傍らにねてから、僕はなだめすかしつ、

究極の或ものを得ようと切實に要求した。

實に不可思議な一夜だつた。

女のすぼめた兩足は、氷の如く冷くなつて了つた。

女は凡ゆる强力でもつて、僕の願ひを肯んじないのだ。

頭髮は亂れ、ピンはもげ、二つの乳房は胸にのた打つてゐた。

吐切れ〳〵に女は、

『何うしてもあなたの意に今應ずる事は出來ない、その前に殺して下さい』とか、